

山家悠紀夫『景気とはなんだろうか』 岩波新書 2005 年

第 3 章 戦後日本の景気循環 (1)

問題提起

「日本経済が、高度成長から低成長へと移行したのに伴い、資金不足時代から資金余剰時代へと変化した」(P93,L8) とあるが、この変化がバブルの発生にどのような影響をもたらしたか。

選んだ理由：

バブルの発生には様々な要因があるが、その一つとしてこの変化が何に影響してどのようにバブルの発生に関わっているのか、その関係性を考えてみることも大事だと思ったから。

C グループ：

金融緩和が実物投資の増加をもたらす効果が減り (98 頁、93 頁)、資金の供給量が需要量を上回り、余分な資金は投機的な投資へと向かい、景気回復に伴う株価の上昇、土地価格の上昇により、バブルに繋がった。

D グループ：

資金が余った結果、投資先が設備投資などの実物投資から不動産や株式など投機的な投資へと変化し、資産価格の高騰の原因となった。

A グループ：

資金不足時代から資金余剰時代へと変化したことで、金融緩和をしても実物への投資がかつてほど積極的にされることがなくなった。代わりに余分な資金は投機的なものへと投資されるようになり、その結果、株価や土地の価格の上昇に拍車をかけバブルの発生に影響を与えた。

B グループ：

余分な資金は景気回復に伴う株価の上昇や「土地神話」も影響して投機的な投資へ向かった。この投機的投資で株式や土地の価格が上がっていったことや金融緩和が長期化する見通しがバブルを発生させる要因となったと考えられる。

小林コメント：

余分な資金が発生した原因として、バブル経済の前に「資金余剰時代」に入っており、それに日銀の大幅な金融緩和 (1985 年末から 1989 年初まで) が重なったという点をとらえておく必要があります。